

令和2年度

入学試験問題

国語

*解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

次の文章を読んで以下の問いに答えなさい。

結論から先に言ってしまうと、いま、企業が求めるコミュニケーション能力は、完全にダブルバインド（二重拘束^{しゅうそく}）の状態にある。

ダブルバインドとは、簡単に言えば二つの矛盾したコマンド（特に否定的なコマンド）が強制されている状態を言う。たとえば、「我が社は、社員の自主性を重んじる」と常日頃言われ、あるいは、何かの案件について相談に行くと「そんなことも自分で判断できんのか！ いちいち相談に来るな」と言われながら、いったん事故が起こると、「重要な案件は、なんでもきちんと上司に報告しろ。なんで相談しなかったんだ」と怒られる。このような偏ったコミュニケーションが続く状態を、心理学用語でダブルバインドと呼ぶ。

現在、表向き、企業が新入社員に要求するコミュニケーション能力は、「グローバル・コミュニケーション・スキル」＝「異文化理解能力」である。

「異文化理解能力」とは、おおよそ以下のようなイメージだろう。
異なる文化、異なる価値観を持った人に対しても、きちんと自分の主張を伝えることができる。文化的な背景（コンテキスト）を理解し、時間をかけて説得・納得し、妥協点を見いだすことができる。そして、そのような能力を以て、グローバルな経済環境でも、存分に力を発揮できる。

まあ、なんと素晴らしい能力であろうか。これを企業が求めることも当然だろうし、私もまた、大学の教員として、一人でも多く、^①そのような学生を育てて社会に送り出したいと願う。

しかし、実は、日本企業は人事採用にあたって、自分たちも気がつかないうちに、もう一つの能力を学生たちに求めている。あるいはそのまったく別の能力は、採用にあたってというよりも、その後の社員教育、もしくは現場での職務の中で、無意識に若者たちに要求されてくる。

日本企業の中で求められているもう一つの能力とは、「上司の意図^{いぶ}を察して機敏^{きびん}に行動する」「会議の空気を読んで反対意見は言わない」「輪^わをミダさない」といった日本社会における従来型のコミュニケーション能力だ。

いま就職活動をしている学生たちは、あきらかに、このような矛盾した二つの能力を

同時に要求されている。【1】、何より始末に悪いのは、これを要求している側が、その矛盾に気がついていない点だ。ダブルバインドの典型例である。パワハラ的典型例とさえ言える。

現在、この「ダブルバインド」は、^{注2}統合失調症の原因の一つとも考えられている（これはあくまでも仮説だが）。このような環境に長く置かれると、多くの人が、「操られ感」や「自分が自分でない感覚」「乖離感^{かいり}」などを感じるようになるという。その結果として引きこもりが起きやすくなる。

いま、日本社会は、社会全体が、「異文化理解能力」と、^②日本型の「同調圧力」のダブルバインドにあっている。

一つの小さな家庭の中でも、ダブルバインドが繰り返されれば、それが統合失調症や引きこもりの原因となる。だとすれば、社会全体がダブルバインドの状態にあるいまの日本で、ニートや引きこもりが増えるのは当然ではないか。いや、そのような個別具体の現象面だけではなく、日本社会全体が内向きになっているとされる理由も、おそらくはここにある。日本社会全体が、コミュニケーション能力に関するダブルバインドが原因で、内向きになり、引きこもってしまったている。

私は、このダブルバインドは、子どもの成長過程で、長い時間をかけた形でも行われてきたと考えている。

日本でも、この一〇年、二〇年、表現教育、コミュニケーション教育ということが、やかましいほどに言われてきた。【2】、^③どうも私たち表現の専門家の側からすると、日本のこれまでの表現教育というものは、教師が子どもの首を絞めながら、「表現しろ、表現しろ！」と言っているようにしか見えない。そういう教員は、たいがい熱心な先生で、周りも「なんか違うな」と思っているも口出しができない。

私は、そういう熱心な先生には、そっと後ろから近づいていって肩を叩いて、「いや、まだ、その子は表現したいと思っていませぬよ」と言っておきたいとも感じる。

この点が、現在の日本の表現教育が抱える一番の問題点ではないかと私は思っている。いまどきの子どもたちをどう捉えるかの、大事な観点がここにある。

私は、いまの日本の子どもたちが、コミュニケーション能力が低下しているとは思っていない。この点はあとで詳しく記すが、もちろん、では問題がないかというと、そうでもない。

【3】一点目が、コミュニケーションに対する意欲の低下という問題だ。

いまの子どもたちは競争社会に生きていないから、コミュニケーションに対する欲求、あるいは必要性が低下しているのではないか。

私はこのことを、「単語で喋る子どもたち」という言葉で説明してきた。

昨今、小学校の高学年、あるいは中学生になっても、単語でしか喋らない子どもが増えている。喋れないのではない。喋れないのだ。

【4】兄弟が多ければ、「ケーキー」とだけ言ったところで、無視されるのが関の山だろう。しかしいまは少子化で、優しいお母さんなら、子どもが「ケーキー」と言えば、すぐにケーキーを出してしまう。あるいは、もっと優しいお母さんなら子どもの気持ちを察して、「ケーキー」と言う前にケーキーを出してしまうかもしれない。

子どもに限らず、言語は、「言わなくて済むことは、言わないように言わないように変化する」という法則を持っている。「ケーキー」をどうしたいのかを聞かずにケーキーを出してしまつては、子どもが単語でしか喋らなくなつてもしかたない。

繰り返すが、単語でしか喋れないのではない。必要がないから喋らないのだ。「喋れない」のなら能力の低下だが、「喋らない」のは④の問題だ。

これは一義的には、まず家庭の問題だろう。「ケーキー、ケーキー」と繰り返す子どもには、父親、母親が「ケーキーをどうしたいの？」と聞いてあげなければならぬ。あるいは、「お父さんやお母さんはわかるけど、それじゃあ他の人にはわからないよ」と言つてあげなければならぬ。

しかしこれは、もはや家庭だけの問題でもない。

学校でも、優しい先生が、子どもたちの気持ちを察して指導を行う。クラスの中でも、いじめを受けるのはもちろん、する方だつていやなので、衝突をカイヒして、気のあつた小さな仲間同士でしか喋らない、行動しない。こうして、わかりあう、察しあう、温室のようなコミュニケーションが続いていく。

【5】以下のような問題もある。

全国を回っていると、小学校一年生から中学校三年生まで三〇人一クラス、組替なしといった地域がたくさんあることに気がつく。こういった環境で、熱心な先生が表現教育を行おうと張りきつて、

「さあ、今日はスピーチの時間です。太郎君、前に出てきてください。先生もみんなも

よく聞いているからね、三分間、何喋つてもいいですよ」

と言うわけだが、これではスピーチは成立しない。なぜなら、太郎君以外の二九人は、もう太郎君のことをいやというほど知っているから。太郎君も、いまさら話すことなど何も無い。少子化がボディブローのように効いて、子どもたちから表現への意欲を奪つていく。

表現とは、他者を必要とする。しかし、教室には他者はいない。

わかりあう、察しあうといった温室の中のコミュニケーションで育てられながら、高校、大学、あるいは私の勤務先のように大学院生になつてから、さらには企業に入つてから、突然、やれ異文化コミュニケーションだ、グローバルスタンダードの説明責任だと追い立てられる。

繰り返す。子どもたちのコミュニケーション能力が低下しているわけではない。しかし年々、社会の要求するコミュニケーション能力は、それを上回る勢いで高まつていている。教育のプログラムは、それについて行っていない。

子どもたちは、このギャップを敏感に感じ取り、大人になることを嫌がってしまう。もちろん、大多数の子どもたちは、どうにかそこは折り合いをつけてうまくやっていくのだろう。しかし、少し心の弱い子は、引きこもつてしまつたり、ニートになつてしまつたり、あるいは心を病んでしまつたりする。それらは決して、その子の努力が不足していたとは言いきれない側面が多々ある。だつて、優しい先生も、優しいお母さんも、異なる意見を持った人とうまくつきあつていく方法なんて誰も教えてくれなかったのだから。みんなわかってくれたのだから。

そのような環境で子どもを育ててしまつた以上は、その子どもたちが「どうして、みんなわかってくれないの？」と感じてしまうことを、単純に甘えだと切り捨てることはできないだろう。

これもまた、時間を経た「ダブルバインド」とは言えまいか。

「伝える技術」をどれだけ教え込もうとしたところで、「伝えたい」という気持ちがある子どもの側にならないのなら、その技術はテイチャクしていかない。ではその「伝えたい」という気持ちはどこから来るのだろう。私は、それは、「伝わらない」という経験からしか来ないのではないかと思う。

いまの子どもたちには、この「伝わらない」という経験が、決定的に不足しているの

だ。現行のコミュニケーション教育の問題点も、おそらくここに集約される。この問題意識を前提とせずに、しゃかりきになって「表現だ!」「コミュニケーションだ!」と叫んだところで意味はない。

(平田オリザ『わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か』による。ただし本文を一部省略した。)

注1 コマンド——命令

注2 統語失調症——精神病の一つ。妄想が生ずるとか周囲に関心を持たなくなるとか病気の型はさまざまだが、現実との接触がうまく運ばなくなる。

問一 部 a～e の漢字はその読みを答え、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 空欄【1】～【5】に入る言葉として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号を繰り返し用いてはならない。

ア あるいは イ しかも ウ しかし エ たとえば オ まず

問三 部①「そのような学生」とはどのような学生か、説明しなさい。

問四 部②「日本型の『同調圧力』」の具体例として適当でないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 文化祭で本当は演劇をしたかったが、他の人たちがお化け屋敷をしたと言ったのでそれに従った。

イ 部活動では先輩に気に入られるように、言われる前に冷たい飲み物を用意しておくことにした。

ウ 昼食時に最初の人が「Aランチ」と言ったので、他の者も「私もAランチ」と同じものを注文した。

エ 好きな先生に薦められた本なので、少し難しく感じたものの、がんばって最後まで読み通した。

オ 皆が早くホームルームを終わらせたいと思っっているようだったので、何も言わず黙っていることにした。

問五 部③「教師が子どもの首を絞めながら、『表現しろ、表現しろ！』と言っている」とはどのようなことをたとえて言ったものか、説明しなさい。

問六 空欄④に入る言葉を、本文中から五字で抜き出しなさい。

問七 部⑤「時間を経た『ダブルバインド』とはどのようなことか、説明しなさい。

次の文章は角田光代「ふたり」の全文である。これを読んで後の問いに答えなさい。

出ていって、と言おうとして、一瞬迷い、出ていってやる、と言いなおした。聡史は少し驚いた顔で私を見た。出ていって、と言われると思って身構えていたんだらう。出ていってやる、ともう一度、今度は声を大きくして言った。携帯電話と財布を握りしめ、寝室にいつてコートを着、毛糸の帽子を目深にかぶる。聡史は私のあとをついてきて、出ていくつて、どこいくの、と弱々しい声で訊いている。なんだか気持ちが悪かった。それで、出ていってやるつ、と玄関先でもう一度叫んで、鍵の束をつかみ、いきおいよくおもてに飛び出した。ちよつと、なつちゃん、という聡史の声が扉の向こうで聞こえた。一階で止まっているエレベーターを呼び出すのがもどかしく、六階ぶんの階段を駆け下りる。

駐車場でマンションを見上げると、私たちの部屋には橙色の明かりが灯っていた。そのなかで幸福な夫婦が暮らしていそうなやわらかい明かりに見えた。さらに視線を上につつぱりあげると、やけにくつきりと星が見えた。吐く息が白かった。

車に乗りこみエンジンをかけたところで携帯電話が鳴った。ディスプレイに聡史の名前が点滅している。出てやるもんか。アクセルを踏みこむ。

数時間前にはじまった喧嘩のきっかけは、三日後の私の誕生日のことだった。席の取りにくいレストランをなんとか予約したのに、その日聡史は出張にいかなければならなくなつた。そんなのはしかたのないことだ。私だつて仕事をしているからよくわかる。問題はそれとだ。よりよつて聡史は、誕生日を祝うような年じゃないんだし、そういうの、そろそろやめにしない？と言つたのだ。じゃあいくつまでが誕生日を祝つても許される年で、いくつになつたら誕生日を祝うべきではないのよ、と訊くと、それが嫌みだということにも気づかず、やつぱ三十歳が境じゃないのかなあ、なんてまじめくさつて答えやがつた。信じられない。

運転するのは久しぶりだつた。いつも助手席に乗っていたから、甲州街道が空いていて助かつた。右折はもちろん左折もなんだかこわくてできず、いくあてもないまま私はただ前へ前へと車を走らせた。ファミリーレストランやコンビニエンスストアの明かりがどんどん流されていく。どの明かりも、私たちの暮らす部屋と同じに見えた。そのな

かで、(2)が談笑しながら食事をしているように。

聡史と結婚して三年になるが、喧嘩は数知れない。出ていって、といつも私が言い、聡史はおとなしく部屋を出ていった。聡史が出ていった部屋で、私はなんだか陣地を確保した戦闘部隊のような気分で、ソファにふんぞり返つて煙草を吸い、聡史の隠し持っているいちばんいいワインを開けて「A」飲み、女友達に電話をかけて聡史のことをあしざまに言つた。どこでどう時間をつぶしているのか、聡史はきまつて二時か三時にそつと帰つてきてリビングのソファで眠つていた。その都度なんとなく仲なおりにきた。ごめんねと言ひ合うわけでもなく、反省会をするわけでもなく、おたがい日常に負けるみたいに、あわただしく会話しながら朝食を食べたり、八時九分の電車に乗るために二人で駅まで走つたり、気がつけばいつも通りになつていた。

けど、と私は思う。けど、今度は違う。聡史が謝らないかぎり私は絶対に許さないし、なんでもなかつたふうに二人ぶんのコーヒーをいれたりなんかしない。いっそそのまま車に乗つ取つて部屋に帰らなかつた方がいい。

【B】明かりのついたディスカウントショップが前方に見える。少し前まで中古車センターだつた場所だ。へえ、ディスカウントショップなんかできてたんだ。独り言を言いながら、ウインカーを出し、駐車場に車を入れる。車を苦勞して停め、二十四時間営業らしい店内に足を踏み入れる。もう十時を過ぎているというのに、店内にはずいぶん人がいた。ペットフードを大量にかごに入れてる毛皮コートのおばさん、腕を組んで香水を見ているカップル、明らかに飲み会帰りの若いグループ。必要なものはひとつもないのに、私は店内をじっくり見ていく。

えつ、こたつが一万円もしないつてどういうこと。炊飯器もずいぶん安い。今どき花火なんか売つてるけど、買う人いるのかな。ヴィトンのバッグも安すぎるけど、偽物なんじゃないのかな。ああ、女の子がねだつてる、彼は買うんだろうか。街道沿いのディスカウントショップの店内を歩いているだけなのに、なんだかだんだん気分がハイになつてくる。考えてみれば、夜、こんなふうに目的もなく出歩いたことなんかなかった。食事を終えて後かたづけをしてお風呂に入って目覚ましを七時にセットして眠る。明日仕事場にいったらすべきことをリストアップしながら眠りを待つ。自分が今いるのは今日なのに、つねに明日のことに思いをはせる毎日。

家電製品の陳列棚の前に私は足を止める。エスプレッソマシーンが二万円切つてる、

買ったちやおうか。銀色のそれを手のばし、私は苦笑する。さつき、帰らなくなつていいと思つたばかりなのに、もうこれを部屋に持ち帰ることを考えている。

エスプレッソマシンに背を向けて、私は店を出る。入り口のわきに、屋台が出ている。耳の輪郭に沿つてびっしりピアスをはめたおにいさんがたこ焼きをくるくるひっくり返している。夜に流れる白い湯気に引かれるようにして、たこ焼きを一パック、買った。屋台のわきのベンチでひとり、あつあつのたこ焼きを口に運ぶ。口から盛大に煙が流れる。おかしくなる。こんなところでひとり、たこ焼きを頬ばっていることが。

私、聡史と結婚するまで、自由だったな。ふとそんなことを思う。会社帰りに友だちと深夜まで飲んで、しまった駅のシャッターに寄りかかつてしゃがみこみ、始発を待つずつとおしゃべりしたりしていた。週末、兄の車を借りて、ひとりで温泉巡りをしたこともあった。あのときどこまでいったんだっけ。長野のずっと奥のほう、十月なのに雪が積もっていた。三連休のなか日に友だちと電話で盛り上がって、そのまま落ち合つて大阪までいったこともあった。あのときもたしか、たこ焼き食べたんだ。ホテルがどこも空いていなくて、結局飲み屋で朝までつぶしたんだっけ。自由というか、身軽だった。ひとりどこへでもいけたんだもの。誕生日を祝ってくれる相手がなくなつて、なんとも思わなかつた。

ソースとマヨネーズのべつたりくつついたプラスチックパックを捨て、缶入りのお茶を買つて車に戻る。携帯電話を見ると、聡史からの着信履歴が二件あった。携帯電話を助手席に放り投げ、エンジンをかける。駐車場を出てさらに西へ車を走らせる。赤信号で車を止め、ダッシュボードからCDを選び、デッキに入れる。音量を思い切り上げる。と、勢いよくポ^{注2}グスの演奏が始まる。青信号でアクセルを踏みこむ。なんだかどこへでもいけそうな気がした。しかも明日は土曜日だ。どこまでいったって目^④覚まし時計は追つてこない。運転の勘が戻ってくるのと同時に、ひとりで暮らしていたころの自由さと身軽さがゆつくりと全身に広がっていくようだった。

大月、という標識が見え、わくわくする。大月の先には甲府がある。山梨に入れば温泉がある。今日はそこで泊まって温泉に浸かろう。大阪のときみたいに空いている宿がなかつたら、どこか外湯に入つて車で眠ればいい。明るる日は喫茶店でモーニングを食べ、さらに西へ向かう。この街道がどこまで続いているのか確かめるためだけに走る、そんな酔狂をやってみるのもいい。

窓の外に民家を改造したようなうどん屋が見える。店内の明かりはまだついていて、窓際に座る数組の客の姿が見えた。そうして私は思い出す。ここ、聡史ときたことがある。車を買つたばかりのころだ。車があることがうれしくて、毎週末、どこかというあてもなく車を走らせたんだ。そうだ、思い出した。この道がどこまで続いているのか確かめようと言つたのは聡史で、けれど車を走らせているうちにおながが空いて、日は暮れるし店はないしで険悪になつて、このうどん屋の明かりが見えたときは心から安堵^{あんど}して駐車場に車を入れたんだ。あのとき聡史は天ぷらうどんを食べて、私は煮込みうどんを食べた。食べはじめれば険悪さは嘘みたいに消えて、次の週末の予定を【C】考えはじめたんだ。

うどん屋を過ぎると、あたりはいきなり暗くなる。街灯が無表情に続き、自動販売機の明かりが【D】あらわれては後ろに流れていく。どこまでもいける、という軽快な気分はまだ私のなかに残っていた。わくわくもちつとも目減りしていなかつた。けれどハンドルを操作する私は気がついていて、自由で身軽って、さほどおもしろくない、ということに。

だって私はさつきから、ずっと心のなかで聡史に話しかけているのだ。こんなところにデイスカウトシヨップができたよ。エスプレッソマシン欲しいってサトちゃん言つてたよね。ねえ、たこ焼き食べてみようか。この道はどこまで続くんだろう。温泉いっちゃおうか。このうどん屋、きたの覚えてる？ うどん屋があるならたこ焼き食べるんじゃないかな。

そうなのだ。私はかつて自由に気軽で、それを充分味わつて、それでだれかといつしよにいることを選んだ。遅くなるときは相手に断り、帰れないときは相手に気兼ねし、たつたひとりで遠くにいくことのできない、そんな不自由を選んだのだ。誕生日をひとりで過ごしてもへっちゃらな自由ではなく、祝ってもらわないことに腹をたてる、そんな不自由を。

助手席に置いた携帯電話がまた鳴る。私は車を路肩に停めて、それを手にとり耳にあてる。^⑤

悪かつたと、聡史の声が聞こえてくる。出張から帰ってから誕生日を祝おう、と声は告げる。

五十歳になつても八十歳になつても、誕生日を祝ってくれるのならは許す。私は少々

いばりくさって言う。

わかった、祝う。聡史は言う。出張のときは無理だけど、でも、日をずらしてちゃんと祝うよ。

聡史の声の背後は、しんと静まり返っている。出ていってと言われて出ていった聡史も、どこかの町を歩きながら、かつて自分が持っていた自由と、自分の選んだ不自由を思い出したりしたんだらうかと、そんなことをふと思う。

サトちゃんの誕生日も、死ぬまで祝ってあげるよ。

私が言うと、聡史はほっとしたように笑った。じゃあ帰ってくる？ と続ける。

うん、と答えるのが恥ずかしくて、私は言う。

たまには前みたいにドライブしようよ。目的もなくずっと走ってみようよ。私が運転するからさ。

それ、ちよつとこわいんですけど……。

暗い車のなかで私たちは短く笑いあう。あのデイスカウトショップ、二十四時間営業だったよな、と私は考えはじめている。激安エスプレッソマシーン、買って帰ろうかなど、明日からまた続く生活のことを、早くも考えはじめている。まっすぐどこまでものびる道路のように、前へ前へと進むしかない、私たちふたりの生活。

注1 甲州街道——東京都の日本橋から山梨県の大月・甲府を経て、長野県に至る街道。

注2 ポーグス——The Pogues イギリスのロックバンド。

問一 部a「ふんぞり返って」、b「あしざまに」、c「酔狂」の意味として適当

なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a ふんぞり返って

ア 横柄にいばった態度で イ 何かにもたれかかるようにして

ウ 他人を憐れむ態度で エ 身を縮めるようにして

オ いかにも怒った態度で

b あしざまに

ア とうとつに イ 荒々しく ウ 嘆き節で エ うらみがましく

オ 悪意をもって

c 酔狂

ア 酒に酔って取り乱すこと イ とりたてて意味のないこと

ウ 変わった物事を好むこと エ ひどく大それたこと

オ ばかばかしいこと

問二 空欄【A】～【D】に入る言葉として適当なものを次からそれぞれ選び、

記号で答えなさい。ただし同じ記号を繰り返し用いてはならない。

ア いそいそと イ おずおずと ウ ぼつぼつと エ こころこころと

オ がばがばと

問三 部①とあるが、この時の「私」の心情を説明しなさい。

問四 空欄（②）に入る表現としてもっとも適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 幸福な人たち イ いがみ合う人たち ウ 平凡な人たち
エ 忙しい人たち オ 苦しみ人たち

問五 部③とあるが、それはなぜか。その説明としてもっとも適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 欲しいと思っていたものが格安で売っていたので、物欲が満たされたような思いがしたから。
イ 誰にも気兼ねすることがなかった結婚前の生活を思い出し、自由な気分になっているから。
ウ エスプレッソマシンを買って帰れば聡史が喜び、仲直りのきっかけになると思ったから。
エ 彼氏にプレゼントをねだる女の子の姿を見てうらやましくなり、思わず嫉妬したから。
オ 真夜中にディスカウントショップをうろつき回ること、悪いことをしている気分になったから。

問六 部④とあるが、この比喩はどのようなことを表現したものか。説明しなさい。

問七 部⑤とあるが、なぜ「私」は「聡史」からの電話に出る気になったのか。その説明としてもっとも適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 久しぶりにひとりの自由さと身軽さを存分に楽しんでリフレッシュした「私」は、そろそろ「聡史」を許してやってみようという気分になっていたから。
イ 実際に自由で身軽な夜を過ごしてみると意外とおもしろくなかったため、これなら「聡史」とけんかでもしている方がまだよいと考えるようになったから。
ウ 以前「聡史」と二人で行ったドライブ中に立ち寄ったうどん屋のことを思い出した「私」は、やはり「聡史」のことを心から愛していることに気がついたから。
エ ひとりでのドライブにも少々飽きはじめていた「私」は、以前に部屋を追い出した時の「聡史」もつらかったに違いないと反省していたところだったから。
オ 若いころにひとりの自由さと身軽さを満喫した「私」は、その上で好きな相手とふたりで生きていく不自由な喜びを選択して結婚したということに思い至ったから。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、高忠といひける越前守の時に、いみじく不幸なりける侍の、夜昼まめなるが、冬なれど、帷をなむ着たり（①）。雪のいみじく降る日、この侍、清めすとて、物の憑きたるやうに震ふを見て、守、「歌詠め。をかしよう降る雪かな」といへば、この侍、「何を題にて仕るべき」と申せば、「裸なる由を詠め」といふに、程もなく震ふ声をささげて詠みあぐ。

X はだかなる我が身にかかる白雪はうちふるへども消えせざりけりと誦みければ、守いみじくほめて、着たりける衣を脱ぎて取らす。北の方も哀れがりて、薄色の衣のいみじう香ばしきを取らせたりければ、二つながら取りて、かいわぐみて、脇に挟みて立ち去りぬ。侍に行きたれば、居並みたる侍ども見て、驚きあやしがりて問ひけるに、かくと聞きてあさましがりけり。

さてこの侍、その後見えざりければ、あやしがりて、守尋ねさせければ、北山に貴き聖ありけり、そこへ行きて、この得たる衣を二つながら取らせて、いひけるやう、「年まかり老いぬ。身の不幸、年を追ひてまさる。この生の事は益もなき身に候ふめり。後生をだにかでと覚えて、法師にまかりならんと思ひ侍れど、戒師に奉るべき物の候はねば、今に過し候ひつるに、かく思ひかけぬ物を賜りたれば、限りなくうれしく思ひ給へて、これを布施に参らすなり」とて、「法師になさせ給へ」と涙にむせかへりて泣く泣くいひければ、聖いみじう貴みて、法師になしてけり。さてそこより行方もなく失せにけり。在所知らずなりにけり。

（『宇治拾遺物語』より）

注1 越前守：越前国の国司（現在の知事のような役割）のこと。

注2 夜昼まめなる：夜昼真面目に勤めていた。

注3 帷：裏なしの一重の薄い着物。

注4 清めす：外の清掃をする。

注5 北の方：奥方。夫人。

注6 かいわぐみて：くるくると丸めるように畳んで。

注7 侍：侍たちが待機している所。詰所。

注8 あさましがりけり：感心した。

注9 聖：高德の僧。

注10 後生をだにかでと覚えて：せめて来世だけでも何とかしたいと思つて、

注11 戒師：出家の戒を授けてくれる師僧。

注12 布施：仏事の際、お札などとして、僧に渡す金銭や品物。

問一 (①) に入る言葉として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア けら イ けり ウ ける エ けれ

問二 部②とあるが、それはなぜか。説明しなさい。

問三 部③と言ったのは誰か。適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 越前守(守) イ いみじく不幸なりける侍(この侍)
ウ 北の方 エ 聖

問四 和歌Xは、「裸でいる自分の身にふりかかる白雪は、いくら振り払っても消えないことです。」という意味であるが、「白雪」にたとえられているものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 白衣 イ 白髪 ウ 白梅 エ 白雲

問五 部④とあるが、「居並みたる侍ども」ほどのようなことを「問ひ」かけたのか。適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 真面目に働いているのに、なぜ貧しい侍のままなのか。
イ 仲間がいる詰所の中で、なぜ震えているのか。
ウ 高価そうな二枚の衣服を、なぜ持っているのか。
エ 侍として働いているのに、なぜ法師になるのか。

問六 部⑤の解釈として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「この侍」の行方がわからなくなったので、越前守が不思議に思って、
イ 話を聞いていた仲間の侍たちがいなくなったので、「この侍」が不安に思って、
ウ ほうびとしてもらった二枚の衣服がなくなったので、「この侍」が変に思って、
エ 自分と奥方の衣服がなくなったので、越前守は「この侍」があやしいと思って、

問七 部⑥とあるが、誰が誰に「取らせ」たのか。その組み合わせとして適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「越前守」が「この侍」に イ 「越前守」が「聖」に
ウ 「この侍」が「越前守」に エ 「この侍」が「聖」に

問八 部⑦とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 今、生活が苦しいけれども何とか幸せになりたいと思って越前守夫妻からもらった衣服をお布施として差し出し、「法師にだけはしないでほしい」と、「この侍」が涙にむせびながら頼んだので、かわいそうに思ったから。

イ 今、もう年老いて働けなくなったので何とか助けてほしいと思って越前守夫妻からももらった衣服を布施として差し出し、「法師を雇いたい」と、「この侍」が涙にむせびながら頼んだので同情したから。

ウ 今、不遇であるが来世は救われたいと思って越前守夫妻からもらった衣服を布施として差し出し、「法師にしてほしい」と、「この侍」が涙にむせびながら頼んだので立派に思ったから。

エ 今の世は無駄なものばかりなので来世は何とかして便利な世にしたいと思って越前守夫妻からもらった衣服を布施として差し出し、「法師として学びたい」と、「この侍」が涙にむせびながら頼んだので感動したから。

四

文学史に関する次の各問いに答えなさい。

(1) 現存する日本最古の物語で、「かぐや姫」が登場する作品は次のうちどれか。適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 『伊勢物語』 イ 『竹取物語』 ウ 『源氏物語』
エ 『今昔物語』 オ 『雨月物語』

(2) 「行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず」の書き出しで始まる鴨長明の作品は次のうちどれか。適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 『枕草子』 イ 『方丈記』 ウ 『徒然草』
エ 『平家物語』 オ 『奥の細道』

(3) 「我と来て遊べや親のない雀」「めでたさも中くらいなりおらが春」などの庶民的な俳句で知られる俳人は次のうちどれか。適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 松尾芭蕉 イ 与謝蕪村 ウ 小林一茶 エ 良寛
オ 正岡子規

(4) 『みだれ髪』や「君死にたまふことなかれ」などの作品で知られる人物は次のうちどれか。適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 樋口一葉 イ 平塚らいてう ウ 津田梅子
エ 与謝野晶子 オ 高浜虚子

(5) 「長恨歌(ちょうこんか)」などの作品で知られ、『源氏物語』をはじめとして日本の古典文学作品に大きな影響を与えた、中国、唐の時代の詩人は次のうちどれか。適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 魯迅 イ 孔子 ウ 李白 エ 司馬遷 オ 白居易

